當世
[illegible]説
教訓早飛脚
壹

ヘ 13
遠
1714
1

序

其連人の五常有五行の精を
もつて五穀を食し五臓をやしなふ
色聲ハ五辛を嗅ゝ者五郎八茶
碗に五器ぬつてら嘯虎は五種香
廓にゆくハまなんても五色あり

門 へ 13 號 1714 巻 1

のいふとは近頃の流行唄や
一日書肆何某に仁篆謀智行を
乞つれまゝしなし当世ち尽雑話
とそその美ちくの奇談をきふし
多まれを携へ不縁此兄ハ浅くぞ
久しき事らぬ連ハ難波のくし

ゆるしは云もさくあ杼戯げに
晨心風と静乃このも不りせ可ハ
笑るゝ浮秘諸国每郎中るゝ
摺糸をさそふけふさ続ハ当分乃
田婦も大坂下りら人ハ狭楽の心
世るあある紙浮世五雲て世るへ

かしこ道を面白くふいと行ものは
稀なれ、先の現在の姦悪は
乱行せし御しときての、能くはりも
なまじひと教訓早乱御と題するもの

朝鮮堂
弘慶子述

教訓早乱御　巻之一

仁に偏るおこゝろよし。義に偏る男達ぞ。
礼に偏る直つぽいもの。智に偏る佞人。信に偏る
ゆするいつはりは。今のうき世に目をつけど。
ごふ志よふ何と御贔屓海苔にだてし矢来の
数よりおゝし。さしでもかゝる人身を合せ聞いでも。
又人をそのまゝのもあるまじ。それが申すふ。
識に仁を為すの君子義にいさむ、さもしゐね。
礼をこのむ人。智にさとき賢人。信をつくす
者はまくあるなりて。ゆんざいしてそとも申されねど。

先ハ十人が内九人まで。浮世の世らしきにまよふおちまる。
又かねてしまおもはれ惟ハえより苦なれど。むかしの
ゆいごの遺ハくもる梅の八千代なる塚を伴ひたる
あらぶとろ。差恥の心も無の恥しあり。それより
ものかなしさがなじ。實まことにしらずん身をつくし
んとせめて財るをなかりで。芸能またの川きる人も
ゆかせん。それ仁をなさんとおもりで。先すこしきの
仁よりすべし。まつとあれをとりつらし。孝ふあり。
不孝の名を孝をさきるてとなりし。父母を大なる
いとおしとおもひその刎惻隠なり。廣く況さ

をするとになり。仁ハ本心の全徳にして。ぎりも
物欲のまじらぬ清浄潔白なること水晶へとのごとし。
水と氷ト梅とを比べて心遣済にして。
津の仁ハかなやさらにいれざるまじきものを
もちたかりし。むざくるしくひせてあからぬぞ。人の心なる
まふするへ。イヤハヤおもしろき不孝者の井がごとし。
おくもいふ事なり。なすハ肖一孝なりぬもきる角とも
世の中の親ハ孝ある人へこそ。ゆるうけてもたのもしき
第のうけ合ぬもつらず。酒と遊び事をそぞろ。津の
人をなみおもひ。口おしかりしずまりてくるおもしろき時の

今海さぬまうとおもしや。それも女郎と郎白の
ゆくごとく。月の御命の康成ハまあれ。さらと
やきりのハ肉を擂ぞ。前上ぼり味噌のおじやんて。
遍ゑゐる藪中しきも代修の薦も女郎こなり。
いつれきんといふ雲の。こと人ともる業ハ及ぞ。
濮の店におゐて、こかしくハ。人の人なる人でハなく。
品人なとの人なり是を庸人となり。まこと人とも
あり。又下賤の人なるある時ハ。我身ハ賢しと
自らいへる。其をえてハひとしくなんるを
おもふものハ。ずもしずや。ありなんか。仁よ大をさ

ん坊ふくあり。家ふ今まで大そふなよ。座中縁あり。
大須鰻屋雪同とて。今もつづく肉饗し。御ふし
本まある肉桶者ハ。皆酒貨殿がくや。殺の志れざる
身代がなるしき。其志あらくりする事なれハ。十人斗も
ありぬべし。料久の天秤ハつらさすると持ち擔よ
ひどき。ぬすみのおもふごとを全てしてするむごさがろくよ
こころぎの。其船路を尋ぶとしと小僧。業ぎんのゐるの
目水よねむる。あまりの事けしき。ある土ちあまて
ふなある艶島。渋り中く鳥より蘿よ猫る膝よなる中まで。
なよ立ツづけのふぎりしき。おさまさふ酒祝盃ざけ。

洪風樓
画涼画
大須賀屋

夫婦の中の寐酒さく。ついては口舌を放討の道具を
よろくまあしが。あすのいさゝやもろちくの。中直り
酒買ふ肉食。さぞろーしどこが本源屋に草をがきりん
よしの山。どうぞ味淋酒がうんぱの津るこちらけを。
古文後集でよくきくし。劉伯倫は阮籍とも。
陶淵明は金平に於る酒をぞ賞美しれる。
いそうしき中に。つき神して奈く居るれ。この家の
御亭主。コリヤ子たよ。妻附を出さぬか。エヽ家のつきぬ
せうござりん。ハイヤ学校の孤老先生が。仁とするから
いるたしく心ろ。コリヤ一盃あれがあやまり。ござります

かくふも濁くいく。おもきく場ふおそろしく。深川の
さちぎ。アヽなんとゆうぞ。それよ今朝は今まてもよ
帰りとハヨ。あさぎぞあうまあんさん。ヤサしくと素人な
だらけや人参だらけふ十日も白目を。ハテいろんなとけの
こわしてはぬられぬ不。コリヤ子たよもちつとすぎしく
ゆうきまつてろんど。諸のきせるとうてほふもち候そて
本国のまげといぢり子ぐら。出なむらふかし。同しおちよ
なんをどうぞふら肉所は通ど。おもてころ。水ぎらしよ
うら溜つけて君はあんひらくとの布子ふ袢おり割しの
おしるしいよめな妻るいし。猫は手ぐいの八丈帯。

ほどまへはこびはかりに二十七八な艶色もいきな男が
出船とこうより。大地によりだん。コレハどちへお成なさる。
繁昌なれバそれがしがおさきへまゐらね。サ　お出なされませ。
ミハヤものゝ丸へなかまつと左右にはむかひなされませ。今りに
月ゞこれます。アヽ濁よりは出船。私はきのふ彼岸ぞんじの
我画とて丸へ欄船によりまして。取柳だしの
落日で白菜がされさとはなんど。イヤハヤ　思ひよ中が
まへもうく。ヘウタイコハ　そこ引あげし。思ひの外うまやがりりん
なかうく潮も出るよまかしき。山高べのあかひとへなりとバ。
西東へ寺あつまれバまつさへその詠をありそふかなすべらしき。

直に舟もちし深のある。さゆうそぞくすいものさへしつらひ
遊びの上とこし。法帥の書もゐるく。儀をまなれる
その風情も交なりやたれもするなり。それくらぞこへ
なりとお好次第。端の方は左右なる好がみいはね。この上は
是のかくいし。奴どんな不勝手なお客でも。まぐにこの気色
中町しま。なりませうふれはさしづうけあん。ナント今夕御馳走の
出座ぶりを。河岸の光景がかくへ中がまふすとず。すゝめなせバ
おれはるをかしの　まつれは何へきの歌の粋らしいの。
酔らいなこと気とすれて。そもくとるは何月何日から。
去人さゞめよの折から　なれバ。すぐさま出立けり。

夕ぐれハ。それハ旅。それハ又かきの肉あるさたのしら。どう
何と出来ます。露の膳ハおりあがりぱまることゝぬ雇ぬぬ
中。帆をひきつれて船あびれとも。ろびやうし掛声押ぬき。
金殿か挂盤をうらす今様の楽観楼枝峽に溢んで
水晶に似たり。ゆかふへおすれてざびしきが又
さら船でや。春こうしくて上船の指図すでにあ
女の郎。仙屋があれを呼ならさ。静閑が久敷てアリカヤ。
アヽ女性が。石を枕くぞめしくと物んぞけぬ上船が進
謡にまさふ弁ゆゆるのかへ。ぱきゑすれと此船を
流く付させて宿路をとれいさ志し露の。ぐなおかり

船をかゝりし棧橋ぬお肩へちよつとお志ゃせアさふ付く
ゆびつきん内へはいるゝ及ぬ。サアそれでも此新造金う。
アヽコレそれて出してはいらぬ。コヽそれより横丁此
おかしをつれていかふ。イヤ才アレく。ころちくへくるか。コレハマア
おかし坊。と花れひまそうな。アイひるまざしきがござり
ませんかう。今夜ハどうでもまいりやせん。てそれこそ
悠鏖かな。君が船に便船して。四月のはしきを詠めさがつ
謡ひうきやら。三味せん節もとり出かう。サアく
とすゝめられ。そんなら女郎さんそふいふて。イヤそんな
事をさがしく。マアころちくきさきのく。佐野くゝりの

十念し。跣り毫身をたるぐんとす。西をさうしろたま。
まどれざアノ打れてもたりなん。ホ茶して来させて下されと。
いかさみれ営よりぞゝも空しき二十日あ。ぢつかでも
かゝでもとめかへつさう。穀さず迄て何と年おくと。柳
新郭のうれると。イヱてそれでゆる人へくちてませぬ。ゾテ
どうか次うこれ其しぢう。マア此般くともりはさそふく
うつしの世沢が有る名サアく噺さ。是非なくと志られて。
此女讒をもとかぐし。弟の謀りといて連るまでとハが
恥とるし志バかりで。燿ハまそく立のぼる。どゝや物の名んで引され。
ゆうしさ及まりも勝りあれど。おん悪魔さまるゆくし。

てまずかゝりかくし。もと毎丁に往着するが。おどゝひの
御会より。お客が大勢お入りて。お吸ものよお取肴よと
さゝめくぞ。それが手よろこしう更元しん。見事の吉慶かとふ
四十枚。錆よき人の伝ひそう。おりしあ。おやまつて一ぱい
とり和とし。さまゝでよからり。大きな驚きぎ。コハこれぞといゝぐ
せんとおもひしが。そこへむしこゝに何気なき袴でふくさを
つゝみの包へぞ仕舞る。それをと気さゝれど。あざらめられて。
身のうへあるいはとけさがりて。今夜井戸へつかし抑よ
あそばすと。まゝうをもしらに志ぞくれしを。小ぶむらい
の実は嘉ぐろぐしに気のある日こ元年イ。二人の分家する工面で。

此ッ君のうへさまざまなれども。ひくく見らるゝはうれしさ。浮世を
うらやむ男。主上より世生の心ね。今をごくさして申ます
を考へなば。おまへさまに思ひ付られ。今の風俗しは男の上也。
いくあくるゆゑ守りなされば。これが御ほんのおもて気色。さしても
縁もござりませねど。おもしい出し御ふ事なれ。一遍の
此事ならをおもふのこと申しといへ。されどもせむかふてかせぬが哀れさよ。
且那を顕ゆ子よ体面と。かならずなづめて守りつるぞぶらふ
四座敷は御はなしならて申し候へども。きまじしまくけし
座敷をする。中にも旦那一ぱいきげん。ふるへしはきりしづ。
此川のいとどんぶりつきかけとては悩しいまので中々

おもされていへるし。御年寄とかくまふらけ合。
んなるゝと大こに作付られ。是晩妻子彼女に
溺く去人少女去へつまてきれいな住居いたし
さる。そこの手鍋のらしこれが下人木の為なり
かや。今からと女まうきてい。又なさき仕しもうと
哀くならる。仁を為すりの撫航よいでべきや。
そのつなぎ人の命をすくふとれがなむもこゝろへ
ぐるし。草の命と。人の命と。ちまかく官さんば
草のことへみ。ましいども八とかくましいらんらか家の存
おしきらくべし。かくして日と経るまでし。

十日あまりもたゝしに。旦那ハやうやうつらいをがつた。
外へ出かけの又銭湯でもこの小僧がつれゆけバ。
湯屋へのるんくをあつまま山ずでふもうけんする所に
かゝ十人斗のそこりんびんのきたん組の中に
三十四五ともみゆる。髪にひたいとぬきあげて下まげとかふ
月代うすきが身ちうのせなかハ菊と牡丹へちらしけ。
縮緬ちりめんの下帯をちらりとみせかけ。旦那ト見るより
首すじとこしまへぴつたりとやらしめ。ねれハマア
まるととましてのめくしとまつかりはき。ゲア袋へ
ちびやかれと引立れバ肉の月代たおくさま関手に。

どろくとかくへとんでおり。コレハ困りやうじ。せんだんな。
何の事とも志れぬに。こちの旦那をイヤ高生の。女郎の事。
どこを志やうすぞ様子をいふらく。ヤアまごまごつくこいば様子まで
紋所へいらやきれるといぶんらがゆうかうすやらなぞるりかな。
一ゝ首とひつこぬので。百八ぶんのふの珠数よましして耳へ
かけてあるくさゝきでも。そろ女房をマアまちやうし
志あくがつらい。あれがくるあとちよろまかし。薩摩あるよ
かゝつておいてこれ。へんやア目がまいらうとおもふとさんご
はいきつ。月代もあきれて。首をかげる女とまいるぞ。
まあれらが女房かし。コリヤあしてごとぞ。ま

はせにぎりし此膓(むね)のうちをあかす。実ハえしぢやマアちくらと。
十人並をとる所まで浮世の後へよせる。何を見るもほどて。
コレあんまりえまりあるものでござんすが。サア東へいかうとおもひなと。
追立て浮世の戸を引ん。よほど大きなおとすとこそ。さて奥(おく)の
まいをすを泪くしきけバ。元来女ハ此ぐぶとらんぐ者が女房と。
呼のくろる経(きやう)文の文句。さうそく並のものへ入をやつて。おの
女をよびよせてはなすれバ。すこし顔らし。此上者をいつわり
えんをめて。どふぞ幸さいよの分別に。身をさるげるまで
志あるうをこしらへ。経におめにかかりつれど。腰のうら縁(ね)を
おつとくハそうぬ。サアどふぞしよふもある。この身ハとんと

まかせますし。せんどのはなれ大ちがひ。ぞく経(きやう)はまよ
すくねるきおいぞ。サア低めいくあるが。二ツ箇で。志ふら。
へんとうんどおすると。さあござるざしきのけしき
は新造も二しまとも。びやあせものあものぞくゆじ。
志あしうさし出やむもころろ。パアくとふそえ程ある。
叶をぬるみん紅裕よ祢(いの)るよう。の光るものがきてえが
あやふれバ。二十両かうはつらいかられバ。何金。ハア金
づくで女房壹(これ)バ大根畑(だいこばたけ)やろそる。切をせの享らるもらぷ
金百両ハぶしく。金じやはごんせぬと。本で暴てくる
ふこみのこそて。それらしが三千両。パチる庸子むすめさいに。

明治廿二年
五口六号

といふ金をもうけるといふわけ。コレ　身分の為での二事あり。家名を
たもつもの。よきやうにせんとのくふうをげんもなく。よろづ代々へ譲りもの
のこさんと思ふ故。ちと成とも。何事でもきんべんの中から
ありがたき。天命じや。それとしらで。いましめしれど
女房がさい状。亭主がさいふをかくして居らるゝ。女は
是より近所を見て。家内も皆ころちせしが。ある
夜女房しらせをきゝければ。だんなのゆそで今世の者の
きもの。衣食二三千。ゆかりもなく情のなき人
ふうある金をうきよさるゝ小づかいまで。二十
両ばかりつかいまいてゐられ　いましとあて。

あんまりけちのめいぼくは。大すがやぶるその
ひとりごん。そうしてある事ではなり。仁から
おこりしことにて。愛を婦人はおまさずすまする
元ににも子さんとあらがそのつとめは孝をあり。その
孝をくらずんば。仁の仁たるおもひとびらしく
ある人さやとのまもなくなかるれはすみてそ